

誤解や差別 悩む日々

被爆の正確な情報なく

「みんな警戒してねえ…。私が通ると原爆がうつるじやろうと言つて引込むの」。広島に原爆が落ちた1945年8月6日、当時24歳の梶野清子(94)＝松山市＝は夫の勇(故人)と島根県との県境付近にある村に避難し、そのまま質素なわらぶき屋根の空き小屋を借りて暮らした。被爆の急性障害で清子の髪は抜け落ち始め、周囲で心ないうわさが飛び交った。周りで被爆者が亡くなるたび

「みんな警戒してねえ…。私が通ると原爆がうつるじやろうと言つて引込むの」。広島に原爆が落ちた1945年8月6日、当時24歳の梶野清子(94)＝松山市＝は夫の勇(故人)と島根県との県境付近にある村に避難し、そのまま質素なわらぶき屋根の空き小屋を借りて暮らした。被爆の急性障害で清子の髪は抜け落ち始め、周囲で心ないうわさが飛び交った。周りで被爆者が亡くなるたび



結婚したころの梶野清子(右)と夫の勇。原爆は2人の人生を大きく変えた。1940年代前半、広島市

えひめ
戦後70年

「温かさに支えられるようになった。朝起きると、いつも玄関にダイコンやニンジンが置いてあった。「本当によくしてもらいました。新鮮なものを食べて栄養が取れると、髪も抜けなくなった」清子は47年と49年に次女と三女を出産。今後の生活を考え、夫の実家がある松山へ居を移すことになった。転居のうわさを聞きつけ、止めようとする村人もいた。「(被爆について)何言われるかわからん。ここにいなさい」(中田佐知子)

残虐性示す事実隠蔽

原爆によって広島・長崎で計約21万人を殺された日本が、なぜ当事国の米国に責任を問えずにいるのか。「封印されたヒロシマ・ナガサキ」などの著書がある広島市立大広島平和研究所講師の高橋博子氏は、米国の「情報操作」や、連合軍占領下の「情報統制」を要因に挙げる。

日本は1945年8月10日、原爆は毒ガス以上の残虐な兵器であり、国際法違反だと訴えた。だが、米国は原爆製造の過程で放射能の危険性を知りながら、公式見解では被爆地の残留放射能やその危険性を否定し続けた。高橋氏は、国際法違反の批判を回避し、連合国による日本占領を続けるためだったとし、「公式見解は実地調査した結論というよりも、政治的判断

から出された」と分析する。45年9月には、連合国軍総司令部(GHQ)が「占領軍に対する批判の禁止」など10項目からなるプレスコードを出し、報道機関の検閲も実施した。原爆の記事が掲載されても「放射能が生殖細胞に及ぼした影響で背の高い人間が出現するだろう」などと「明るい話題」のように取り上げられ、残虐性を訴える記事は消えていった。プレスコードは占領が終了する52年まで続き、高橋氏は「米国は原爆こそ戦争を終結させた」と強調する一方で、残虐性を示す事実を隠蔽(いんぺい)し、核戦略を有利に進めるための時間稼ぎをした」と指摘している。

(高田未来)